

盛口 満¹：海外からのブナ科堅果の琉球列島への漂着Mituru MORIGUTI¹：Nuts of Fagaceae (*Lithocarpus*) drifted ashore to Ryukyu Archipelago from oversea

海流散布をする植物の散布体は、コルク質の発達や種子内に空所が見られるなどの独特の構造をもち(中西 1994)、科を越えた様々な植物でこのような散布形式をとる。一方でブナ科の植物は一般に動物散布または重力散布をしていると考えられ(中西 1994)、海流散布をする種子に関する報告に、今まであまり取り上げられてこなかった。今回、琉球列島の海岸において、海外産のブナ科であるオニガシの堅果を認めたので報告する。

今回の報告のきっかけとなったのは、与那国島で長年、漂着種子を採集されている久野幸子氏のコレクションを拝見させてもらえる機会を得たことによる。久野氏のコレクションにはモダマ類をはじめとする種々の漂着種子が見られたが、その中に海外産と思われるブナ科の堅果が多数、含まれていたのである。その後、久野氏に案内され、与那国島の海岸において、実際に漂着しているブナ科の堅果を採集する機会にもめぐまれた。またこのような機会を得たことで、琉球列島の他の島々においても同様なブナ科の堅果が漂着していることに気づくことができた。

与那国島の海岸に漂着しているブナ科の堅果には複数種が見られる。漂着したブナ科の堅果から、正確な種の判定は困難であり、この中に何種類が含まれるのかは、まだ識別できていない。ただし、与那国島にはアマミアラカシ、ウラジロガシといったブナ科植物が分布しているものの、漂着している堅果は明らかにこれらの種類と異なったものが見られた。これらはまた、他の琉球列島の島々に分布しているオキナウラジロガシやウバメガシ、マテバシイの堅果とも異なっていた。つまり日本国内に分布をしていないブナ科の堅果が漂着していることになる。

与那国島の海岸に漂着したブナ科の堅果は、おそらくは台湾から漂着したものと考えられた。これは与那国島と台湾は111kmしか離れておらず、堅果の供給源として、もっとも可能性が高いためである。与那国島の海岸で見られる漂着物と台湾との関わりを深さを表す例として、台湾産の生存したアカマルバネクワガタが、漂着、採集された記録があげられる(月刊むし編集部 2005)。海外産と思われるブナ科の堅果の漂着は琉球列島各島でも見られるが、一番多く見られるのが与那国島であることも、漂着したブナ科の堅果の産地が台湾であることを示していると考えられる。この例を挙げると、2003年9月23日に、久野氏は与那国島の海岸で、一度に18個もの海外から漂着したブナ科の堅果を採集しているが、西表島、渡名喜島、沖繩島など、他の島において著者が採集をした場合には、せいぜい一度に2個、海外から漂着したブナ科の堅果を採集するのにとどまっている。

先にふれたように、漂着したブナ科の堅果から、その種を正確に同定するのは困難である。これはブナ科の堅果にはよく似通ったものも多いためである。しかし、どの属に分類されるかの判断は可能である。例えばマテバシイ属の堅果の場合は、コナラ属のものに比べ、相対的に厚い果皮を持っているため、それと識別できる。付け加えると、日本産のマテバシイ属はマテバシイとシリブカガシしかないため、この両種の堅果と異なった形態をした堅果は、海外産とみなすことができる。さらに、漂着したマテバシイ属の堅果の中には、際立った特徴を持っているため、種の同定が可能だと思われるものが見出された。与那国島に漂着したブナ科の堅果の供給源と考えられる台湾には全部で18種のマテバシイ属が分布している(金平 1973)。与那国島で漂着しているものが見つかったきわめて特徴的なマテバシイ属の堅果は、直径が20~25mmほどで、全体が木質化した厚い果皮で覆われているものである。堅果を切断してみたところ、その果皮の厚さは3mmあった。またブナ科の堅果には俗に「へそ」と呼ばれる、未熟なときに殻斗と結合している部位があるが、この堅果の場合、堅果の表面の8割がざらざらとした「へそ」であり、平滑な表面は残りの2割ほどで、その部分は堅果の頂点を中心にややくぼむようにとりかこんでいる。(図1)このような特徴を持つ堅

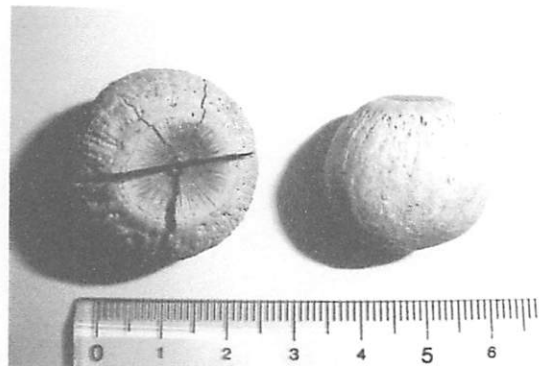


図1. 漂着したオニガシ (*Lithocarpus castanopsisifolia*) の堅果

果をつけるものは、台湾産のマテバシイ属の中ではオニガシ (*Lithocarpus castanopsisifolia*) だけである (金平 1973)。このため、与那国島に漂着したブナ科の堅果の中に、オニガシが含まれているという同定結果をくだした。

2003, 2004両年に久野氏が与那国島で、9回にわたって採集した海外産と思われる漂着マテバシイ属堅果48個のうち、オニガシの堅果が採集されたのは2回、それぞれ9個と2個であった。また著者が2003年から2007年までの間に西表島で1回、渡名喜島で1回、沖縄島で3回 (本部, 喜如嘉, 奥の3ヶ所) 採集した、計7個の海外産マテバシイ属堅果のうち、2005年2月19日に、沖縄島、奥で採集した1個がオニガシの堅果であった。

オニガシの堅果は一見、沖縄の島々の海岸で普通に漂着しているテリハボクの種子によく似ている。そのため漂着していても、これまで気づかれていなかったことも多かったと思われる。また、沖縄島より北方、場合によっては本土の海岸においてもオニガシの堅果が採集されることも考えられる。さらに台湾以外の南方から、別種のブナ科の堅果が漂着する可能性も考えられる。今後、漂着をしているブナ科の堅果に、さらなる注意はらう必要があるだろう。

最後に貴重な資料を提供いただいた久野幸子氏に感謝を述べたい。

引用文献

月刊むし摺集部. 2005. 与那国島で見つかったアカマルバネクワガタ!. 月刊むし. No.414. 2-3.

金平亮三. 1973. 増補改版 臺灣樹木誌 復刻版. 754pp. 井上書店, 東京.

中西弘樹. 1994. 種子はひろがる 種子散布の生態学. 255pp. 平凡社, 東京.

(Received July 24, 2008; accepted Sept. 10, 2008)

¹ 〒902-8521 沖縄県那覇市国場555 沖縄大学人文学部こども文化学科

¹ Department of Children and Culture, Faculty of Humanities and Social Sciences, Okinawa University, 555, Kokuba, Naha-shi, 902-8521